戦う

タヒツチカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦う

【Ｎコード】
Ｎ２４４５Ｗ

【作者名】
タヒツチカ

【あらすじ】
短編の小説。中編詩。戦うってなに？

「戦う」
タヒツチカ

突然、左手で触れた人が破裂したらあなたはどう思いますか。崇めてくれますか。愛してくれますか。それとも恐れますか。怖がり、消しゴムを投げつけ、必死の形相で昇降口へ駆けますか。
となりのクラスの女の子が怪物になります。私は左手をぶらぶらさせながら逃げ惑う生徒を押しのけて（彼らは当然爆ぜます）進む。やっとたどり着いた教室には泣き喚く異形がいます。　私は左手をぶらぶらさせて、彼女の頬を撫でます。やっぱり彼女も破裂します。
二世が現れることはありません。
遠巻きな味方はいます。
彼らはカメラやビデオを構え、私の射程を避け、私を写殺しようとします。不快ですが、私は悪ではないので、それを無視して登校します。
友達はいなくなりました。
もとから居たのか、いないのか。

◆

この学校は海に沈んでいるべきだった。
マックでコーラをすすりながら、そう思った。
ろくでもない。
見知らぬ女性が「あなたのせいでミーちゃんが」と話しかけてき

たけれど、いやいや、そんなの知らないよ。ストローを噛み潰す。へこんだまま、戻らない。
タバコの匂いが、弱点だなぁ。
喫煙席しか空いていなかった。

◆

東京にゴジラが現れて、私は学校を休んだ。
山手線を乗り継いで、戦いに出向いた。次々と倒れていくビルが車両の窓越しに見えた。すっきりしているなって思った。
ゴジラの足元に立つと、思ったよりも大きくなくて、だいたい6メートルほどだった。ゴジラは放射能にまみれた体でビルにのしかかり、ひとつひとつ丁寧に壊していく。案外、ドミノみたいにはならなくて、鉄筋の丈夫さが立証された気がした。
ぼーっとあくびをすると、遠くのテレビカメラと目があった。
はいはい、やりますよ。
私は左手をぶらぶらさせて、ゴジラのしっぽにそっと触れた。ざらざらとしていて、おふろのマットの裏みたいだった。静かにゴジラは破裂した。
この日の夜、崎陽軒のシューマイ弁当を食べた。

◆

ファンタスマゴリアが近付いている。セーラー服とももうすぐお別れだ。
食パンを咥えてアパートを出る。磯の匂いが立ち込めるアスファルトを踏みしめて、走る。けれど快速には間に合わず、各駅停車で行くこととなった。結局、三十分もかかった。
でも遅刻のチャイムは私には鳴らない。
アトランティスではないけれど、海に沈んだ（ほうがいい）学校

は今日も朝早くからやっている。私は十一時ぐらいに校門をくぐった。

教室では授業がすでに始まっていた。

のんびりと席に着くも、違和感を感じた。

黒板が見えない。

鮫は獲物を円の中心に囲むという。

黒板が見えない。

周囲の机が私の視界を囲むように配置してある。クラスメイトの背中ばかりが目に突き刺さった。血の匂いが漂ってくる。

ここは死地だ。

人食い鮫が囲んでいる。触れられないから、殺せない。私は歯ぎしりをした。うるさいと、教壇からチョークが飛んでくる。かわせずに、額で受けた。竹を割ったような音がカコンと鳴る。鮫たちは気に止めず、黙々と黒板を映し続ける。なんだ、草食鮫なのか。

「保健室に行ってきます」

どこからも返事はなかった。まるで無人島のようだ。

そして、ノートは白紙だ。

音のない廊下から、保健室へと向かう。どこのクラスにもまともな人はいなかった。

ひどいものだよ。死人が列をなしている。

前へ習え。

校庭ではサッカーに興じる生徒たちがいる。私が数学を受けていることを知っているのか、いないのか。

左手の包帯をとったら、彼らは「ハンド！」というのかしら。

保健室には先生と、体育で怪我をした男の子と、仮病の女の子がいた。私は絆創膏をもらい、少し先生と正義について語った。話したのはほとんど先生だった。

「力があるのが正義って、先生おかしいと思うの。ほら、アメリカ？　世界の警察っておかしいって思わない？　イランなんて」

カーテンの奥で、男の子と女の子がキスをしている。
だ液の音が漏れていた。
「ね、今なら先生見てないよォ。触るね、触る。いいよな」
「ちょっと声大きいよ、ね、ほら、いいから、こえ、ちいさく」
だ液の音が漏れていた。
「だからね、核兵器なんか」
「はあっ、はッ。はっ」
「あっ、あっ、あっ」
私は左手を振るった。

◆

今日も出動要請が来た。
また東京にゴジラが来たらしい。私は今日も学校を休んだ。
そんなの知らないよ。
なんて言えたらいいのだけれど、世間の目が今も私を捉えている。
大砲のような雄叫びをあげながら前回に増して暴れるゴジラを、山手線の車両から眺める。
あれは、良いゴジラだろうか。それとも悪いゴジラだろうか。
どうだっていいね。
現場について早々、私は早足でゴジラのしっぽを掴んだ。
ブチン、と千切れる音がして、しっぽだけが跳ね上がり、東京タワーをひっくり返した。
まあ、もとから曲がってたし、いいんじゃないかな。
しっぽだけが切り取られ、ゴジラの胴体が私を蹴り上げてくる。
すんでのところでかわしたけれど、スカートの端を瓦礫で破ってしまった。
なるほど、トカゲの尻尾切りだ。要らないものを、要るもののために捨てる。
ふうん。

どうでもいいかな。
ためらいもなくゴジラの足をつかんだ。破裂する足首。
轟音が鳴り響く。耳をふさいでも断末魔がこびりつく。
粉微塵になる怪獣を見つめながら、もしかしたら私は人間じゃないのかもしれないと思った。
大丈夫、それは愛の力だよって、誰かが言ってくれたならいいのに。

◆

ある日、ゴジラの死骸が欲しいという学者が会いに来た。もっと穏便に殺せという。一緒に来た自衛隊のおじさんも、清掃が大変なので綺麗に殺せという。握手をしようとして引っ込めた手が笑えた。
あんまり面白かったので、全部話してあげようと思ったけれど、どうせ力にはなってくれそうもないので諦める。
説明するのもめんどくさい。どうせ分かってくれるはずもないし、わかったところでどうという話だ。全部自分の中だけで終わらせるべきこと。
今日も学校には行かない。
あと2日で終り。

◆

もう、最後だと思うので、敬語で。明日の夜には、もう全部終わっているだろうから。女子高生はもうすぐみんな死んでしまいます。もちろん、それのおまけとして男の子も、あなたのおじいさんもおばあさんも死んでしまいます。こっちは殺されちゃうのですが。
例えば、あなたが死んでしまうとして、最期をどこで迎えますか。
結局、私はそれをこの街で迎えることになります。
左手をぶらぶらとさせながら、私は早朝の街を散歩します。ラン

ニングをしているお姉さんがいます。音楽を聞きながら、走っています。私は声をかけます。
「おはようございます」
お姉さんは足を止めて私を見ます。どこかで見た顔だなあ、と思っているのでしょう。私はそっとお姉さんの腕をつかみます。白い手首にはリストバンドがしてありました。
お姉さんは破裂して、肉塊になります。
戦いの火蓋が落ちました。
破裂した残骸を受けながら、私はまた街を行きます。
間に合えばいいのに。

◆

夜。コルクを飲んだような息苦しさ。この街に死体はない。人間もいない。私がいるだけ。
血だらけの街で一人、ファンタスマゴリアが過ぎるのを待つ。おろしたてのスニーカーはもう真っ赤だ。黒のセーラーも、染めた髪の毛も、通学かばんも、みんな。
……大丈夫、みんな殺した。
染まっていないのは空ぐらいだ。月だけが静かに輝いている。それに反射した液体がガラスみたいにてらてら光る。歩くたびにぴちゃぴちゃと鳴って、不快だ。血溜りが出来ている。
深呼吸をして、耳をすます。生き残っている人はいないだろうか。死者として蘇っている人はいないだろうか。
自分の足音だけがする。
が、うしろ。
女の子があった。完全死体だ。壊し忘れ。
もうだめ。
この街は終り。
ファンタスマゴリアが始まる。

からからと乳母車の音がして、街に暖気が立ち込める。ぬるっとした空気に足をとられる。空を見上げると、さっきの月はほとんど赤茶けていた。私の目がおかしくなっているのだ。あたりの空間に浮遊霊が集まってくる。

女の子の完全死体が起き上がり、笑いかけてくる。元凶だ。アレさえ壊せば！

しかし空に、地面に飛び交う死者と死者とが手を繋ぎ、手を繋ぎ、私を囲う。ロゴスが音を立てる。空間が歪む。複素数列 ｛ｚｎ｝ｎ∈Ｎ が ｎ → ∞ の極限で無限大に発散しないという条件を満たす複素数 ｃ 全体が作るマンデルブロ集合のように、ｙｎ ＋ １ ＝ ２ｘｎｙｎ ＋ ｂの世界が広がる。

「＋：　＋：＊：：：：＋＜？＋、 ⊂⊃ ＊＋＊＊＊＊＊＊＊＊＊＋＋＋＋＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

私は左手を振りかざす。

その中でも、ブッタプロだけが私を取り囲む。すべてを敵に回したこの左手が、歪む。

ガウス平面から点ｃをランダムに選び、そのｃについて数列を計算し、 ― ｚｎ ＋ １ ― ＜ ２となった場合にｚ１からｚｎまでの位置に点を描くという作業を、指定した回数だけ反復。

「ｄ；@：／：．；；＊＊＊＋；；；＊＋＋：：：、；：＋＋＊：：：：：＋＋＊：：：：：：＋＋：：：：：：：＊＊＊＊＋＋＋＋＊＊＊」

泥の匂いと、磯の匂いが混じった臭い。ああ、これは血の匂いなんだ。

ヒラメのような目をしていたはずだ。私は、電波の悪いテレビ。

そんな空想物語だったらいいね。夢が落ちるね。創作ものだね。誰かの書いた詩だね。散文だね、日記だね、ツイートだね。そう言ってマックシェイクを飲むんだ。今日の古文がムズかったとか言うんだ。正義の味方はつらいのだ。今日も七時に起きるんだ。もし私が死んだらｍｉｘｉのいつものボイスが止むから気づいてねとか言

うんだ。終いに私は空を飛んで。
飛んでいくのだ。神様に。神様に。会いに行く。助けて！
誰か褒めて。褒めて。また倒したんだ。みんなのために。
「あなたのせいでミーちゃんが」
いやいや、知らないよ、そんなの。悪いゴジラがやったのさ。私は偉いんだ。すごいんだ。他人とは違うんだ。違うから、違うから。

……そんな問答はもう過ぎたはずだ。
ロジスティック写像に包まれて、私は目を覚ます。
失敗した。
計画倒れ。みんな破裂させて死者の復活を防ぐ。一体でもいたら終わり。ひとつの街どころじゃない。全部。
死んだ女の子が、ほほえむ。

◆

エピローグ。そんなもの人生には無い。
勝ち負けもない。善悪も。たとえあっても、それが幸せかどうかだ。本質はサイコロステーキみたいで、どこも同じ。味だってそんなに良くもない。混成肉だし。
それにしてもここは退屈。学校によく似ている。死人しかいないし、私を恐れて消しゴムを投げてくる。
どう考えてもあれは海に沈んでおくべきものだった。
ふと、私はビームを出す。山が崩れて、さら地になる。
ああ、私はやっぱり人間じゃないな。
大丈夫、それは愛の力だよって、誰かが言ってくれたならいいのに。
大丈夫、何もしなくていいよって、誰かがいってくれたなら。
戦わずにすんだのに。

（後書き）

Twitterとブログしてます。

http://blog.livedoor.jp/tahistuchika/archives/cat_146563.html

http://twipple.jp/user/yataroku

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2445w/

戦う

2011年8月30日03時23分発行